

令和元年6月14日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02797

研究課題名（和文）ロシア語を母語とする日本語学習者の音声習得研究 - 第二言語習得理論の構築のために

研究課題名（英文）Acquisition of Japanese Pronunciation by Russian Native Speakers: for Constructing the Second Language Acquisition Theory

研究代表者

小熊 利江 (Oguma, Rie)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：00448838

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ロシア語母語話者を対象に、日本語音声の習得状況の縦断的な調査を行った。分析結果から、日本語能力レベルごとの学習者の発音の不自然さの傾向が明らかになった。また、発音の不自然さは「リズム」、「単音の音色」、「イントネーション」、「音の強弱」、「母音の無声化」、「ポーズ」、「その他」に関するものの7種類に分類された。さらに縦断研究の結果、ロシア語母語話者にとってリズムと単音の音色に関する音声特徴の習得が難しいことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国人労働者の受け入れ拡大を決めた日本において、日本語教育学の研究は重要である。そのもととなる第二言語習得の理論構築に寄与するため、ロシア人による日本語の音声習得過程の一部を明らかにした。本研究の結果は、日本語でのコミュニケーションに必要な音声教育および音声教材の開発に役立つと考えられる。また、データ収集の困難なモスクワにおいて、同一被験者について長期にわたり収集された発話データ自体が希少であり学術的に価値が高い。

研究成果の概要（英文）：A longitudinal study was conducted on acquisition of Japanese pronunciation by Russian native speakers. The analysis revealed the features and tendency of pronunciation unnaturalness in each level of learner's Japanese ability. The unnaturalness of Japanese pronunciation was categorized into seven groups, which are "rhythm", "sound quality", "intonation", "stress", "vowel devoicing", "pause" and "others". In addition, the longitudinal study indicated that it is difficult for Russian learners to acquire Japanese speech rhythm and sound quality.

研究分野：日本語教育学

キーワード：第二言語習得 日本語教育 ロシア語母語話者 発音の不自然さ 縦断研究 モスクワの大学 自然発話スタイル 学習過程

1. 研究開始当初の背景

社会のグローバル化にともない、外国語によるコミュニケーション能力はますます重要視されており、第二言語習得研究は非常に注目されている分野である。外国語学習において、会話など音声によるコミュニケーション能力の習得に対する学習者のニーズは高いが、教育現場では指導があまり行われていないのが実情である。文法や作文など書面で行える研究に比べ、口頭能力に関する研究が大きく後れをとっていることが原因の一つであると考えられる。

第二言語としての日本語教育においても、自然に流暢に話したいという学習者側の要望は多いが、発音や話し方に関する指導教材は非常に少ない。コンピュータや音声分析ソフトの普及に伴い、学習者数の多い英語や中国語などの母語話者を対象とする日本語音声習得研究が徐々に行われてきているが、その他の言語に関する研究は限られている。対象とする母語話者のデータが少ないため、日本語音声習得に関する理論構築を行うことが困難な状態である。

日本語教育に200年以上の長い歴史を持つロシアにおいても、ロシア語母語話者(以下、「ロシア人」とする)の日本語音声習得に関する実証的研究はほとんど行われていない。仲矢・稲垣(2005)によると、ロシアの外国語教育方法の特徴は文法対訳法と暗記と翻訳練習を中心とする教授法である。調査の結果、日本語教師の不得意分野として第1位に挙げられたのが「アクセント・イントネーション」、第2位「表記(漢字)」、第3位「音声」の指導であった。渡辺(2011)の研究では、ロシア語圏の日本語教師には音声指導を行うための十分な知識がないと述べられている。現在、ロシアでは体系的な日本語音声教育が行われていない状況であると言える。教師が音声指導を行う際に理論的な支えとなり、音声指導教材の開発にも寄与できる研究を行うことが必要である。

本研究は、先行研究のない未開拓の分野の研究である。本研究の成果が、ロシアの日本語音声教育の現状を改善し、また第二言語習得理論の構築に寄与することを期待している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、研究データのほとんどないロシア人による日本語音声の習得過程および習得上の困難点について明らかにすることである。習得過程を体系的に明らかにすることにより、音声指導の方法および指導教材の考案が可能になると考えられる。その上で、第二言語習得研究における理論構築のためにもデータを提供する。

具体的には、以下の3点を研究目的としている。

- (1) ロシア人日本語学習者の音声習得状況の特徴や傾向を明らかにする。
- (2) ロシア人日本語学習者の音声習得過程について、横断研究を用いて予測し、縦断研究を用いて検証する。
- (3) 同一学習者を縦断的に観察し、ロシア人による日本語の音声習得過程を詳細に記述する。

3. 研究の方法

第二言語習得研究のデータは、同一の学習者について一定期間の習得過程を観察する縦断的な手法(質的研究)と、同じような言語背景の複数の学習者を一つのグループにして習得過程を予測する横断的な手法(量的研究)によって収集されることが多い。本来、習得過程を解明するには、個人の縦断的な観察が不可欠だが、同じ学習者を長期に調査対象とすることは困難であり、それを補う目的で横断的な手法を用いた研究が多く行われている。

研究代表者は、科研費研究「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」(代表者: 迫田久美子)の海外協力者として、2013年にモスクワの大学にてロシア人の日本語発話のデータ収集を行った。その際、被験者51人の日本語発話の収録を行うことができた。

本研究ではこの51人の発話を分析し、ロシア人の日本語音声習得過程について横断研究によって予測した上で、縦断的な手法を用いて検証する方法を採る。

- 対象: モスクワの大学で日本語学を専攻するロシア人51人(2013年5月の時点で1年生14人、2年生10人、3年生10人、4年生9人、5年生8人)
- 調査時期: 2013年5月(51人)、2015年3月(24人)、2016年5月(12人)、2017年10月-11月(5人)、2018年10月-11月(4人)
- データ: (a) 学習者の習得状況が最も表れやすい自然発話スタイルの音声
(b) 日本語能力測定テスト

具体的な手順は、以下の通りである。

- (1) 学習者の音声習得過程を測るため、定期的にモスクワで同一被験者のデータを収集する。
- (2) 収集した日本語発話データを編集し、音声学の専門家に発話音声の聴覚評価を依頼する。それと並行して、発話データの文字化を行う。
- (3) 聴覚評価の結果を学習者の日本語能力レベルごとに分析して、ロシア人の音声習得上の特徴や傾向を明らかにする。

(4) 同一被験者の音声習得過程を縦断的に詳細に記述し、横断研究の結果と対照する。その結果から、ロシア人の音声習得上の困難点を明らかにする。

4. 研究成果

本研究では、ロシア人による日本語音声の特徴や習得上の困難点について、横断研究と縦断研究を組み合わせることによって多角的に検討した。学習者の発音を自然さの観点から分析した結果、ロシア人日本語学習者の音声習得状況と習得過程の一部が明らかになった。研究の成果について、以下にまとめる。

(1) データの希少さ

まず、本研究において収集されたデータの性質について述べる。第二言語習得研究では、同一被験者について長期に観察を続けることは難しいが、同一被験者を縦断的に観察することによってのみ、実際の習得過程の記述と分析が可能になる。また、音声データを分析に耐えうる質で収集することにも労力と時間がかかるため、第二言語習得研究において音声習得の縦断研究はほとんど行われていない。

第二言語習得研究の縦断的手法において、約5年半の長期間にわたる日本語音声データは例を見ないほど大規模で、データ自体としても大変貴重なものである。データ収集の困難なロシア国内の日本語学習者を対象にした本音声データ自体が希少なものであり、学術的な価値が高いと言える。

(2) ロシア人の日本語レベルと音声習得状況

学習者51人の発音の自然さに関する評価を日本語レベル別にまとめると、表1のような分布になった。発音評価の総合点は1から5までの5段階で、自然さが最も低いものが1、自然さが最も高いものが5である。

表1において、各レベルで中央に位置する学習者(中央値)を点線でつないだ結果、中級前半レベルから中級レベルにかけて逆方向にカーブを描く様子が見られた。つまり、日本語能力の向上の過程において一時的に発音の不自然さが増す局面があることを示している。レベルごとの発音評価の平均点も3.4から3.1に低下している。このような現象は、Tarone(1978)の提唱した発音習得上の近似化のプロセスであると考えられる。なかでも、Gatbonton(1978)の「漸次拡散モデル」や小熊(2008)の「音韻の範疇化プロセスのモデル」を支持する可能性が指摘された。

表1 日本語レベルと音声習得状況(調査1回目、単位:人)

発音評価 レベル	1.0- 1.4	1.5- 1.9	2.0- 2.4	2.5- 2.9	3.0- 3.4	3.5- 3.9	4.0- 4.4	4.5- 5.0	平均 点
母語話者相当	-	-	-	-	-	-	-	-	0
上級	-	-	-	-	-	-	-	1	4.7
上級前半	-	-	-	-	-	-	1	3	4.6
中級後半	-	-	1	-	7	6	4	-	3.5
中級	-	-	5	-	9	-	4	-	3.1
中級前半	-	-	1	1	2	3	3	-	3.4
初級	-	-	-	-	-	-	-	-	0

(3) ロシア人の日本語発音の不自然さの種類と傾向

ロシア人による日本語の発音の不自然さの種類と傾向について分析した結果、発音の不自然さは「リズム」、「単音の音色」、「イントネーション」、「音の強弱」、「母音の無声化」、「ポーズ」、「その他」に関するものの7種類に分類された。ロシア人の日本語の発音には、特にリズム、単音の音色、イントネーションに関する不自然さが多く見られた。

さらに、(2)の中級レベルにおける発音評価の低下と(3)の7種類の不自然さの出現について、個人の習得過程において確認するため、縦断研究として2013年から2016年までの3年間の音声データの分析を行った。

(4) 横断研究に表れた現象を縦断研究で検証

日本語能力の中級前半レベルから中級レベルにかけて一時的に発音の自然さが低下する現象について、個人の習得過程をもとに検討した。1回目の調査時に日本語能力が中級前半レベルであった学習者の縦断的な観察結果から、中級レベル程度の学習者の場合、日本語能力の向上

に伴い発音能力が自然に高まるという単純な過程にはならないことが明らかになった。

(5) 習得過程における発音の不自然さの変化

ロシア人の日本語発音の不自然さのうち、最も多く現れたリズム、単音の音色、イントネーションの3種類の音声特徴が、個人の習得過程においてどのように推移するかを観察した。縦断研究の結果、リズム、単音の音色、イントネーションの3種類の不自然さは、日本語学習の過程で少しずつ減少した。しかし、それぞれの不自然さの減少の割合は異なっていた。イントネーションについては不自然さが大きく減少する一方、リズムと単音の音色については不自然さが多く残る様子が観察された。この2つの音声特徴は、ロシア人にとって最も習得困難なものであると考えられる。このことは、個々の学習者の習得過程を縦断的にたどることによって初めてわかることである。

<引用文献>

- 小熊利江 (2008) 『発話リズムと日本語教育』 風間書房
- 迫田久美子 (2014) 『2012 年度科学研究費研究報告書』 科学研究費助成事業「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」(基盤研究 A, 課題番号 24251010, 研究代表者: 迫田久美子)
- 仲矢信介・稲垣滋子 (2005) 「ロシア・NIS 諸国への日本語教育支援再考」『日本語教育』127, 日本語教育学会, 51-60.
- 渡辺裕美 (2011) 「ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点 - 日本人日本語教師に対する調査から—」『日本語教育紀要』7, 国際交流基金, 71-84.
- Gatbonton, E. (1978) Patterned phonetic variability in second-language speech: A gradual diffusion model. *Canadian Modern Language Review*, 34, 335-347.
- Tarone, E. E. (1978) The phonology of interlanguage. *Understanding Second and Foreign Language Learning*, Richards, J. C. (ed.), Rowley, MA: Newbury House.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

- 小熊利江 (印刷中) 「ロシア人大学生による日本語の音声習得状況—日本語レベルと発音の不自然さ」『BATJ Journal』, 英国日本語教育学会, 査読なし, No.20.
- 小熊利江 (2019) 「ロシア語母語話者による日本語の発音習得—横断研究と縦断研究の結果から—」日本語教育連絡会議論文集, 日本語教育連絡会議, 査読なし, vol.31, pp.80-87.
<http://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun31.html>
- 小熊利江 (2018) 「ロシア語母語話者による日本語音声の縦断データの紹介」日本語教育連絡会議論文集, 日本語教育連絡会議, 査読なし, vol.30, pp.45-50.
<http://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun30.html>

[学会発表](計 5 件)

- 小熊利江 (2018) 「日本語の発音習得と指導の可能性」ロシア CIS 日本語教師会・モスクワ国立大学付属アジア・アフリカ諸国大学・国際交流基金モスクワ事務所主催 日本語学・日本語教育学会議
- 小熊利江 (2018) 「ロシア語母語話者による日本語の発音習得に関する縦断研究」日本語教育連絡会議 第 31 回会議
- 小熊利江 (2018) 「ロシア人大学生による日本語の発音習得」英国日本語教育学会 第 21 回大会
- 小熊利江 (2017) 「ロシア人の日本語音声は日本人にどう評価されるか」日本語教育連絡会議 第 30 回会議
- 小熊利江 (2016) 「ロシア人による日本語発話の縦断的データの紹介」東京音声研究会 例会

[図書](計 1 件)

- ロシア CIS 日本語教師会編 (2018) *Японский язык в вузе: актуальные проблемы преподавания 18* (共著) (『高等教育における日本語—教育の現実の諸問題— 18』) 小熊利江 「日本語の発音の習得と指導の可能性—モスクワの大学で日本語を学習する場合—」 pp115-128.
モスクワ: Ключ-С. ISBN 978-5-6041804-3-3

[その他](計 1 件)

- 日本語教育学セミナー 講師
2018 年 10 月 セミナー・テーマ「色々な発音指導を知り、体験し、考える」
ロシア CIS 日本語教師会・モスクワ国立大学付属アジア・アフリカ諸国大学・国際交流基金モスクワ事務所主催 「日本語学・日本語教育学会議」日本語教育セミナー

6 . 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。